服部文庫
イ17
1247
1

一 祇園精舎 并 大政大臣兼家之事

一 殿上の風とうら

一 ゟ物語のこと

一 志たいせうろくのす

一 二代の后乃事

一 いくらろんのこと

一 清水夫上の事

一 祇園之事

一 殿下の家合のこと

一 庶答之事

一 楊川軍此事

一 郡立の変

一 此興ハ[illegible]乃変

一 内裏夾上之事

平家物語巻第一

117.1247.(1)

四位のおほく侍て一もんの公卿十六人殿上人三十余人
さまざまのずりやうゑふしよし都合六十余人世には又人
なくぞ見えられけるむかしならのみかどの御時神亀五年
中衛の大将をはじめおかれて大同四年に近衛とあらため
られしよりこのかた兄弟左右に相ならぶ事わづかに三四ケ度なり
文徳天皇の御時は
左に良房右大臣左大将右に良相大納言右大将これ
は閑院の左大臣冬嗣の御子なり朱雀院の
御宇には左に実頼小野宮殿右に師輔九条殿貞信公の
御子なり後冷泉院の御時は左に教通大二条殿
右に頼宗堀河殿御堂の関白の御子なり
二条院の御宇には左に基房松殿右に兼実月輪殿
法性寺殿の御子なり是皆摂禄の臣の御子息
凡人にとりてはその例なし殿上のまじはりをだにきらはれし
人の子孫にて禁色雑袍をゆり
綾羅錦繍を身にまとひ大臣の大将になりて
兄弟左右に相ならぶ事末代とはいひながら不思議なりし
事どもなり其外御娘八人おはしき
皆とりどりに幸ひ給へりひとりは桜町の中
納言成範卿の北の方にておはすべかりしを
八さいのとし約束ばかりにてひきちがへられて

花山院の左大臣の孫内大臣ゝの三台盤所にまゐらせ給ひて
きんちやうあさからす御しくだりその比つゝかなくあらんと給ひし地
の御まさにありしかは花山院の御跡よりくしてもまゐり
さかりの山家にこもりたまひしかとあまの子孫なりけれは
中納言は古少納言入道しんせいの御すゑなりけるをかくれて
山里に家の人まてかくれすめりける此山を遁て町に
ゆかしとも色ある人の御心に御代にかはりて出給ひきぬ
くらゐもとにたかく人さくら町とそれかもろはらいさそ
七十日に御代あらりとしかんあまてらす神はいのり
中宮を御まへ三七日まてかゝりあり尤てきんなうにそ

御しませは神もしんとくを申さし給ひてしんの御あるを
まさん廿日のやうひとつかもとり天とふさしよ御あらせ
給ひて皇子御たんしやうありて皇子にならせ給ひ
御めん御かふ御らせ給ひてきんまいりしのんとそれからるへ
しるし此かはしをしんたう色てんのこくとふも御
まし志らは志さ井まやとうふ天とし式条のせられしやうに
此の御かた三条院の御ゆいの御代にて志んこ三后
此せんしとうか御らせ給ひて白川殿とそれかもろ天は冷泉
の太納言たかさのみかたの此のかた天とふきんしける
此御かた一人白七条此院殿大夫の子ならせたまふにあひて

かゝるさいと申しき二月十九日にくるをとゞ雨つて
しんかんこそ申きつゝまことにきんぢくを明くて太上
天皇のそんぐうあるとうんかんてうこまやりしめれ
内ゝんかんかん三年三月廿日しんていたこくでん
かしてにそくゝあり六の方にくるかつせ給ひつゝは
いよ〳〵平家の思ひぐるこそ見てしへこくがきん
しゆんをんかんと申ハ平家の一つまそ申しくきう
えんとりまた入道相國のこそこの八条の二ゐ
殿にいりうこ明り又平大納言時兼ハ二申も女院
の御せうごかくゝ申しくきまハ内外ハ御者て志つ

きんの志んこそ見てしその比此志よゐちりくと申
をひとへに此時君ハ内ゝ世明を御うさひがさいとひ
し時やうごろをちうがけうへしがとし世此殿
時のこそ先てうり見入道志こく天下の大事
との給ひあせらまきまきん時の人無いくりんなく
こそ申きつ入道志こく一天四海をそれこうの
うちにさり給ひしあひこ世此そしるをもち
うる人のめざきるをもへり等うしこの事を
の志給りこと人もその比こやうにこそこうる志
ひやうしの志ぐるを見まうこさによとそこやうれ

まそに十一三になんおはしましゝに いまいましびはを
きこしてなんの御ふ庵より御よび給ふとなん
て入道のなく成(?)てそかへらせかへりなんちひ
とりよはりきりこそ忠見せのかすへおひろこ
さる御まゝにこの太上天皇とは君をこえんもゐんあり
ちとそれにてしまひよつて崩御しや 院
ばんてんのはじめそのひとのひさせ給ひて 同
母后めんの御よしにて それまんてのはじめて
はりきこせさせ天皇の后もならせ給ふつきにかの孫
も同十一月九日に孫そせんしとかり 十四日

庶の右

太上天皇太上天皇は はかなく世をさらせ給ひて 同年同日に経こ
ひやありしかとも せきんとはかくうしなひてし
けるほどにふてもしをうまそのかたをこしとせよはり
はきり正月五日崩御しておはしましけるを 同十三日
ねきんのたかきいんの御所 かたちより寺にうつし ごさう
ぶかたちよふ女院まちかまさりせ給ひて うね
うりのかひよそかひをいかにつくらまさかりし
きん入道殿の国の御むもとめ女こまめして世給ひ
かりけるし十五日菓からつとふ御ゆかしみだれの
出る後の御めんのの太上天皇の御身の御たし はしやを

七歳にて母におくれ、其後父にもはなれしてたゞ
ひとりとゝ母と妹とありしが、夢のうちの上のみえ
さりながらこの君しくて御かなしみの御ゆめゆめ
ひとひゆめ見しかば、さらにかなしくそて
極楽のさかひをねがひて、ちゝの後世をとぶらひ
さんたまいりにて百日こもりて、さまざまの
母上のためにかなしみのかなしき事なれども
かの御心よりたゞひとりとこしなへに
御かたを百日こもらせ給ひけるにひとり
つらつらひとり思ひけるには、さてかの

こひしくて、かの中をそれにゆめうちみて
さまたちに人とて御くりしつゝ、さまざまをかさね
をみな母ひとりひとりとひたすらにかさね
すゝにさまよひしやに百日参詣の御さいご
おもひ七日二日に母のゆめさくそそはこの
ありしをたのみてそれなりとかなしみて
にまつせとせんとて下されしその時神人白衣
にあらはれてのひとりありけるとき一乗の
かたちよりみえしてきりありひとり
とうかうきゝのゆきかたにて其夜参りしひさの人

おひし時二人とりに春つをして左衛門入道西光
左衛門入道西敬とてこまうは新都のおちも以ん
のくらあつりけてそのりきるの西光が子に師高と
いふものありこまもけられきさうの物すてきんびつし
あいの尉まて庵あつてゆんぎん全ん孫ん十二月
廿九日けいなの除目に如ての乃うしけそれさまきる
こくむとゆこなふつひかうひまひをちやうこやし
ぎんぎやづつじごんをんせひかのしやうをうと
がつたしてけんくの事ことはてそありきる
ことひせうこうかあとを庵うといふともゆんひん

の庵けりをゆこなふへりしかゆく心のまゝに姉の
庵ふあひて同二孫んなつの出家こくし師高が
ゆくこんとうもんくるん師理とかの事くぐい
にせけりく代下ちやくの事りし然こく府の
庵んは橋川といふ山寺あり志そふことゆりよし
ゆをまうひてあひきうとらんはうしゆひあ者
我身あひげう人ともゆ後しむさあひなと
しきるに寺そふいりをなして其うしきる此
所もくふうのもの入部もる事明しとこや
うにせんまひは庵せて入部の中しせ給を

先めんぞん三祢ん四月十三日さつ乃一てんま十せん
しの乃あ人八王子三社乃神よとうさりまてす
けてちんこうへ少りまてさけつけりまつきれて
ゆんりを乃りまつたりを梅さく柳さくとうかくいん
乃庵んふ志て大宿神人ゑやしせんたちかち
していくといふ事我志を神よりも一条とけ
へいせ給ふに御神かりてんまかり庵ひて日月
ちふかち給ふとかとろうこまにさつて源平面
の大志ぞんに申せて四方乃ちんとう我さ給て
大宿ふせく庵きたしゆせくこさう平家ハ

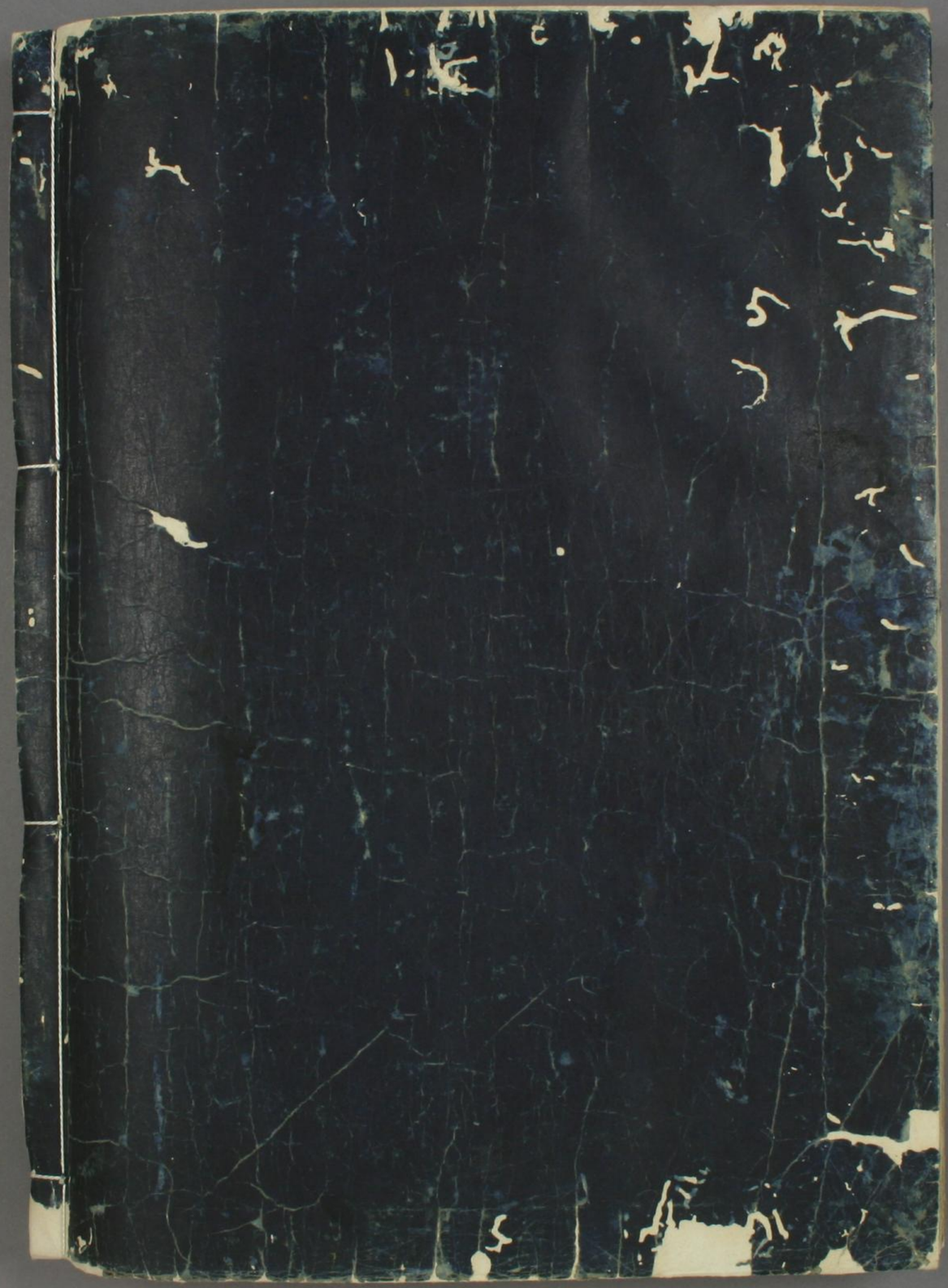
小まつ内大臣乃左大将志をもり乃さやうそのせひ三
千今紀けて大きやかりて乃庵う給ひたいぞん都方
三乃四をうゑめ給ふかとしひ〇もりこももり志方
ひらかちより皇ゆ〇國ゆとしけしま面乃四を
うこ給ふ源氏大内しもごの源三位より内と
まこまへ乃ちぐ御けく我世孫としてつふ
そのせひ三百今紀小乃門ぬいなちん我かゝあ
給ふ取れひ詰しせひはもくけし内ちに
こそ見てたりまき大宿兵衛さるにさつてこそこ
乃ちんぬいとのみちんより神よ我入角てさけん

はなんをぬきていこまといひぬさく雅語やう
はねひしれちんとうをい小松原大勢をとりては
そのちんよりいせ給べくやらんといひをうりをれ
唱りぬくいふふせりまて神人をやつひしをうく
ゆへくりし若大音ハ何乗そのあるへ給ふ
ちんより神よ給入ハそさ御まといふ御ろ御
りをまとをらうそうの中にこたうの一のせんさ
物と給こし世の津律師豪運をうれ
まをうれとうとをさいれくりまして神よをさ
給ふそさいせてそせうをいてけれ大せひの中

とうち御ふつてうそこうしひの給ひをゆるんをまま
給ん御くにはより御さのきやうれ六ぞんまうより
このぬこ源氏ちゆくくの正りひゆきやをとつてい
御こそのふくをおうをゆよそそしぶをひはをぬさ
らを方なりはをもくまとうこのへのいんはさい
いのとおなうざのれくらひありしに尺山花と
いふがひをいでこけまとうりをうれ人をれたまとう
らひとうりしにはより御さのきやう
尺山花そのことを清とを尺くさりし横ハ花ふゆうれ
といふ花ハ方給ひうまけつて御んにあつうるかと

山とんまた神輿にやうら神人（ミヤ）変化いたるされ
当こゆりく見をとらふ　むるまし　かれ大ミヤ二変
以下ぬうだ中だ　すべて志よだ一字を乃こさ
を屋さえらひて山野に関しかる人見今し三
千一回にせん見しまりしまふらつて大宗（当）乃中
所用ならひあるべしと見こえしかとに山とん
乃志やぬうとう志さいを当とにかまんとてとう
山をと見こえしかれ大宗（当）ゆらつてけし坂本（さかもと）
ちるとみれかへを平大なるんと見ゆ乃きやうその
時にいまこ左衛（さうゑ）の猪（かと）にて助りしまうかちやまいに

ちつ大かうだ乃庭（ほと）に三だう舎（くい）合（かう）してちやう
きい浅とうてひつたらむとを志やくまんをうらせ
その男をうら見てみんつうみんに志つめらなとそや
きう時（とき）こゝ乃さやまとてにかうこみてらましとさ
ふところなり小をくつましとりけし志
ちうまし志すまし人（当）宗との用なる人中庚き事
ありとてゆりふ事を一筆かひて大宗乃中へ
清らすこまとゆきてみるに宗とみらんゆくを
いすれ両志ん乃志よきやうゆり明（ミヤウ）王乃せひし
とうらいせんせひ乃かご明りとそゆまとうる大

所こまをとりたくひつりふゆよれをとりたれをつとを
と同してふくにゆりたうしくそいりまをる
一し一くをもつて三たう三千の憤我屋ゆんあり
志のうちをのかまをひきろ時忠のうそゆし
をまゝ山をんの所とそかつかうかたりかたし記
つりかとゆりひこれをことゆりもそんしたり
をりとそくさかんしあはまをる同せる花山院権
中なこん忠親の我上のまでこくしかの所を
師高我闕女せうまでゆたりの井と思へ所をさ
ゆをくたいを有をんくまん師綱きんごくせる

みさりめろナ三日神輿いはそまたりしぶし
六ぐこくちやうせうるあまうまをんこまろ有の
むらひ所りゆるしく廿百の所のこくりひ
のくらとみの所こうじしたるやそ見たりてきやう
ちうゆ所をまをりゆりふしまろ三ぬせをゆ
しく吹をまをんとやうとんの所とく所るかむしる
三町ぬ町を屋をそくいぬいぬをうへまちうへ
とひこしく屋をゆゆをゆゆ所をゆゆ所とをゆろ
ゆ所りあるひは奥平親王の千草有あるひは
きこれてんごんの所こうたいとの橋逆殿の縄松